

本誌には総説1編の他、2編の研究、5編の症例報告が掲載されています。いずれもが力作であり筆者の先生方に御礼申し上げます。

特に症例報告の「頸動脈ステント留置術後遅発性に生じたコレステロールクリスタル塞栓症の1例」は故あって大変感慨深く読ませていただきました。われわれも以前 cholesterol crystal embolism (CCE) を経験しました。その症例は、アメリカ駐在中に軽い脳幹梗塞を発症し帰国後われわれの病院に治療のため入院、偶然無症候性高度頸動脈狭窄が発見され、われわれはそれに対して CEA を予定しました。脳血管撮影後、心臓のカテーテル検査を施行、その後腎機能が急速に悪化したため転院にて腎不全の治療につとめました。いったん自宅退院できたものの、最終的に心筋梗塞にて急逝されました。患者さんはわれわれの医局員のお父様であり、息子の勤務先を頼っての治療でありましたが、血管撮影を契機に結局不幸な転帰をとられました。当時われわれには CCE の知識がなく、どうして急激な腎機能の悪化を来したのかすぐには理解できませんでした。かつて、その医局員との個人的な交友から、故人との黒鯛釣り等の思い出話を聞いていたこともあって慙愧の念に耐えず、今でも CCE という疾患にふれるたびに肅然とした思いがします。この報告の症例は幸い軽症ですみましたが、筆者らが述べているとおり、早期診断のためにまずこの疾患を疑うことが大切であり、読者がこの疾患を知って一人でも多くの患者さんが CCE から救われることを期待したいと思います。

本号には、他に再生医療と脳神経外科診療の日米比較、てんかんの画像と病理の3編の企画連載が掲載されており、いずれもが力作です。特に北野正躬先生の「どこが違うか、アメリカと日本の臨床医療-2」は興味深く読ませていただきました。前号では医学教育から医療制度の違い、脳死や生命倫理の問題を述べておりましたが、本号では医療過誤や医療費について述べられ、最後に今後の日本の医療について提言されています。中でも“医師会にあたる AMA の他にそれぞれの学会が患者団体と協力して、政党や政治家に州議会から国会のレベルまではたらきかける”というくだりは、まさに日本に欠けている点ではないかと思います。日本では医療崩壊が叫ばれ、さまざまな場面で医療危機が論じられていますが、ではどのように医師が行動しているかといえば“立ち去る”以外はなほだ心もとないのが実情です。もはや無謬性などといえば笑ってしまうような官僚と、皮相かつ無責任なマスコミが主導する医療を誰一人是とはしていません。医師あるいは学会が何らかの政治的働きかけや政治的示唆を示さない限り、危機はいつしか常態化するのではないかと危惧します。

最後にコラムの医事法の扉も、福永篤志先生が毎号簡潔にわかりやすく身近な観点から医事法を解説されており、大変勉強になります。